



トマトの被害は、マメハモグリバエやナスハモグリバエよりも少ない。



↑ カボチャを好むため、ほかのハモグリバエより寄生が多い。

↑ キュウリの被害。葉表側に食害痕が多数現れる。ナスハモグリバエの食害痕は葉裏側に多い。

- ウリ科、マメ科、ナス科、アブラナ科、アオイ科、キク科など多くの野菜や花、雑草のイヌホウズキ、スカシタゴボウに発生する（京都府の調査結果）
- 育苗中から寄生するため、苗の移動によって分布が拡大する。また、被害苗が本圃に持ち込まれ、これがその後の発生源になることが多い。

その他

- トマトハモグリバエは近畿地方から発生した侵入害虫であ

るが、現在は東西に分布が拡大し、施設の重要害虫となっている。

防除のしかた

トマトハモグリバエ、マメハモグリバエ、ナスハモグリバエはともに広く分布しており、薬剤に対する感受性も異なるので、発生種の同定を確実にする。その地域の発生予察情報を参照するか、農業の指導・研究機関、農業の販売店に同定を依頼する。雑草のイヌホウズキやスカシタゴボウにも発生するので、圃

場周辺の除草を行う。

施設では換気窓に防虫網を張り、成虫の出入りを防止する。発生初期に、次の薬剤のいずれかを散布する。

トマト ハチハチ乳剤1,000倍(前日 - 2回) スピノエース顆粒水和剤5,000倍(前日 - 2回) トリガード液剤1,000倍(前日 - 3回)

メロン ダントツ水溶剤 2,000倍(前日 - 3回) アファーム乳剤 2,000倍(前日 - 2回)

また、メロンではダントツ乳剤を1株当たり2g、定植時に1回植穴に土壌混和处理する。

ひとくちメモ

ハエ類は蛹となって身を守る

昆虫の幼虫が変身して蛹になること自体、たいへん不思議なことです。この蛹も実に変化に富んだ姿をしています。蝶のように裸のままの蛹もあれば、蛾のように繭に覆われている蛹もあります。

ハエ類の幼虫は、ふつう蛹化するときには体の周囲を硬い殻で覆います。これを繭蛹と呼んでいますが、乾燥や外敵から身を守るのに好都合となっています。

トマトハモグリバエの幼虫はすべて地面に落ちて繭蛹となりますが、繭蛹は俵状で茶色や褐色のため、地面の小さな石の粒と区別がつかず、見事に身を守っています。



↑ ドウガネブイブイの腹部末端部。ラスターと呼ばれる部分の刺毛(矢印)の数や配列で分類が可能。



↑ マメコガネの成虫はイチゴの葉を網目状に食害する。



↑ 幼虫によるイチゴの初期被害。地上部の生育が遅れるとともに葉柄が赤みを帯びてくる(馬場 富二夫 原図)



↑ 幼虫によるイチゴの被害。根が食害された株(右)は一部の葉も枯れ、株抜けとなる。



↑ 幼虫によるサツマイモの被害。イモの表面が食害され、内部に食害が進むこともある。

とは少ない。

- イチゴでは、近年は近似のアオドウガネの発生が多い。アオドウガネは発生時期については初秋まで継続するが、その他の生態や被害を与える作物はドウガネブイブイとほとんど同じである。

防除のしかた

成虫はわずかにイチゴやダイズの葉を食害することがあるが、葉菜類の葉を食害することはない。また、成虫は夜行性のため、成虫が圃場に飛来した数を知ることは不可能である。このため、事前に薬剤を土壌処理して若齢

幼虫を防除する。

イチゴ 育苗時(仮植床)に発生した幼虫がそのまま本圃に持ち込まれるので、仮植床に次の薬剤のいずれかを土壌混和してから苗を植える。トクチオン細粒剤Fを10a当たり9kg(植付時 - 1回) カルホス微粒剤Fを10a当たり9kg(植付時 - 1回) デイブテックス微粒剤を10a当たり9kg(移植時 - 3回)

本圃に定植後、生育が遅延した株や葉柄の赤い株などを引き抜き、土中の幼虫を捕殺して植え直す。定植時に苗の根元を観察し、幼虫を捕殺する。

サツマイモ さし芽の植え付け前

に次の薬剤のいずれかを畝内に処理する。オンコル粒剤を10a当たり9kg(植付時 - 1回) カルホス微粒剤Fを10a当たり9kg(挿苗前 - 4回) この処理をしなかったために被害が発生した場合は、次の薬剤のいずれかを畝上に均一に散布する。パイジット粒剤を10a当たり6~9kg(30日 - 2回) ダイアジノン粒剤を10a当たり5~10kg(30日 - 3回) ランネート微粒剤Fを10a当たり6kg(7日 - 5回) 土壌が乾燥していると効果が減少するので、降雨直前または降雨直後に散布するか、散布後に灌水する。

ひとくちメモ

コガネムシがわいた

1968年からほぼ10年間ほど、静岡県の西部地帯で突如としてドウガネブイブイやヒメコガネが異常発生したことがありました。7~8月には水を張ったタライの上に20wの蛍光灯をつけて捕獲したところ、毎晩毎晩、1,000頭以上の成虫が誘殺されました。どのタライも同様で、こうなると農家は「どこでわいているのか」とため息をつくほどでした。

その後、徐々に終息に向かい、現在では特に大きな被害は出ていませんが、当時の異常発生の原因はまったく何だったのか、結局明らかにはできませんでした。それにしても、自然界では時として、思いもよらぬ大発生が起こるものです。

トマトハモグリバエ



↑ 成虫。近似種があるので注意が必要。

発生消長（成虫）



形態および生態

- 成虫の体色は黒く、ところどころに鮮やかな黄斑がある。外部の特徴はナスハモグリバエ

エ、マメハモグリバエとほぼ一致し、これら3種を肉眼で分類することは困難である。また、一般の生態も近似している。



↑ 雌成虫は葉面に点々と穴をあけ、汁液を摂食する。時にその穴に産卵する。



↑ 幼虫は葉肉内を潜行しながら食害する。葉面に白い線状の食害痕が残るので「絵描き虫」といわれる。

- 雌成虫は、尾端で葉面に点々と小さな穴をあけ、出てきた汁液を吸汁する。時にその穴に卵を生みつける。穴はのちに白い小点となって目立つが、ほとんどが摂食痕である。
- 幼虫は葉表側の葉肉を潜行しながら食害する。成熟幼虫は葉から脱出し、すべて地上に落ちて俵状の蛹になる。多くの野菜や花に寄生する。
- 休眠性はないので、気温が高ければ周年発生するが、6月から10月ごろまでの発生が多い。野外ではほとんど越冬が



↑ 蛹。成熟幼虫は葉表側から地上に落下して、俵状の団となる。

できないので、施設栽培の作物が越冬源となる。

被害のようす

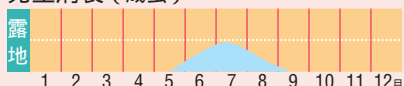
- 幼虫の食害痕は、主に葉の表面に不規則な線状となって明瞭に現れる。のちにこの食害痕は葉表に白く残る。寄生が多ければ葉は枯死する。

ドウガネブイブイ



↑ 成虫は黒色で光沢は鈍い。

発生消長（成虫）



形態および生態

- 成虫は黒く、大型のコガネムシに似る。翅の光沢は鈍い。
- 年1回発生する。成虫は5～

9月に発生するが、6～7月に多発する。

- 成虫、幼虫とも広食性である。成虫は集合して食害する性質が強いので、1樹のみに被害



↑ 1 齢幼虫。頭部は淡茶色で、腹部には3対の胸脚がある。動きは活発で共食いをする。

↑ 地中で1粒ずつ産卵する。卵は孵化直前も白色。



↑ 中齢幼虫。成熟するに従い、尾端を除いて全体に白色部分が多くなる。

が集中することがある。幼虫は多くの草本植物の根部を食害するため、農作物の被害が多い。

被害のようす

- 成虫と幼虫ではエサとなる作物(植物)が異なるため、成虫が好んで食害する樹木の根部に、幼虫の被害は発生しない。
- 成虫は、ウメ、サクラ、バラ、クリ、カキ、ブドウ、イヌマキなどの樹木の葉を好んで食害する。草本植物の葉を食害することは珍しいが、イチゴ、ダイズの葉をこくわずかに食害することがある。

- 幼虫による農作物の被害は、サツマイモ、サトイモ、ヤマノイモ、イチゴ、落花生などに多い。イモ類ではイモに対する直接害が多く、イチゴなどでは根の切断により生育に影響を与える。
- イチゴでは育苗時(仮植床)の被害が最も多い。また、幼虫が寄生した苗を本圃に定植することによって、のちに被害が発生することもある。

その他

- マメコガネ、ヒメコガネの成虫はイチゴの葉を好んで食害する。幼虫は根を食害するこ



↑ 1 齢幼虫。幼虫の頭部は淡茶色で3対の胸脚があり、動きは活発。



ダイズの被害。葉柄や太い葉脈を残して食害する。多発生すると、株全体の葉が食い尽くされることがある。

防除のしかた

ダイズ マメハンミョウの成虫は薬剤に弱く、また、ハスモンヨトウなどダイズの主要害虫が発生する時期と重なっているため、それらに対して薬剤防除を行っている圃場では発生しない。

圃場全域に発生することはないので、捕殺するだけで防除は十分可能である。ただし、マメハンミョウの体液には猛毒のカンタリジンが含まれており、皮膚につくと炎症を起こすので、捕虫網で採集し足で踏むか、ゴム手袋をはめて捕殺する。

イナゴの増えているところでは、マメハンミョウの発生が見え始めているともいわれている。今後、水田転作ダイズの場合は、周辺の水稲にイナゴが発生していないか、気をつける必要があるだろう。

ひとくちメモ

マメハンミョウの産卵条件は？

マメハンミョウは、近年ところどころでゲリラ的に発生しています。この生態について記した文献は少なく、よく分かっていないのが実情です。

また、幼虫は齢期によりかなりの変身をする（過変態）昆虫ですが、私はいまだそれを見たことがありません。何回か成虫を採集する機会があったので、まずは採卵を試みたことがありました。その後、土壌の種類や水分の量を変えるなどして飼育を続けましたが、なかなか産卵してくれませんでした。どなたか飼育を手がけた経験をお持ちでしたら、採卵のマル秘技術をご教示願えれば幸いです。



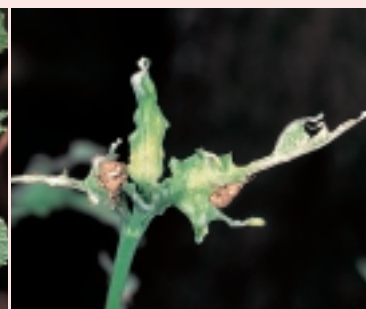
↑ 1 齢幼虫。幼虫の頭部は淡茶色で腹部は乳白色。体全体に短毛がある。脚はない。



↑ 成虫によるイチゴの葉の被害。中肋や太い葉脈を残して食害する。まれに成虫が多数集合し、株全体の葉を食い尽くすことがある。



↑ 成虫によるユキヤナギの葉の被害。



↑ 成虫によるアメリカハナミズキの葉の被害。

時期はアブラムシやアザミウマなどイチゴの主要害虫と重なっているため、それらに対して薬剤防除を行っている圃場では発生しない。

圃場全域に被害が発生することはないので、成虫が確認されたら捕殺するだけで防除は十分可能である。

幼虫が発生する主な植物はユキヤナギ、コデマリ、アラカシなどで、圃場や施設の周辺にこれらが植樹されていると、時に発生が多くなる。それらの樹木に発生していないか注意を払う必要がある。



↑ 成虫によるアラカシの葉の被害。

ひとくちメモ

ゾウムシの幼虫は腹筋の達人

スグリゾウムシの幼虫には脚がありません。地上に落ちたスグリゾウムシの1 齢幼虫はすぐに地中深く潜り、エサである根にたどり着かなければなりません。ではどうやって進むのでしょうか。

スグリゾウムシは、ただひたすら体をくの字のように折って進みます。私たちが腹筋運動をしている姿そのものですが、その効率が非常に悪いことは明らかです。土の中に入るときも、また土中でも、進むためにただひたすら体を折り曲げていては、皮膚はすり切れてしまいそうです。

でも自然というのはうまくできています。体全体を覆う毛が身を守っているのです。

マメハンミョウ



↑ 成虫の頭部は赤褐色、
その他は黒色で光沢は
鈍い。胸部、前翅には
白線がある。白線のな
い黒い個体もある。

発生消長（成虫）



形態および生態

- 成虫は細長く頭部は明るい淡茶
色、その他は黒色で光沢は鈍い。
多くの個体は、胸部、前翅に白

線が縦に入っているが、黒一色
の個体もある。

- 発生は年1回で、成虫は8月に
発生する。
- 成虫は8月下旬から9月上旬に

→
地中に産卵
された卵塊。



土中に卵を産みつける。卵は淡
黄色で細長く、1卵塊には十数
粒から数十粒の卵がある。

- 9月中旬から10月上旬に孵化し
た幼虫は、そのころ産卵したイ
ナゴ、トノサマバッタ、クルマ
バッタ、クルマバッタモドキな
どの卵塊を探して食べるといわ
れている。
- 成虫はダイズの葉を食害するほ
か、ナスやトマトの被害も記載
されている。しかし、静岡県西
部で採集した成虫は、ナスもト
マトの葉も摂食しなかった。

被害のようす

- ダイズでは葉の中肋や太い葉脈
を残して食害する。成虫の食害
量は非常に多い。また、多数集
合する性質が強いので、株単位
で食い尽くされてしまうことが
ある。

その他

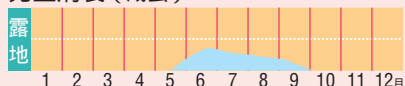
- 荒地地、河川敷近くのダイズ圃
場でまれに発生する。発生数が
少ないので、詳しい生態は解明
されていない。

スグリゾウムシ



↑ 成虫の体色は灰茶色
で、前翅には暗色の
不規則な斑模様があ
る。

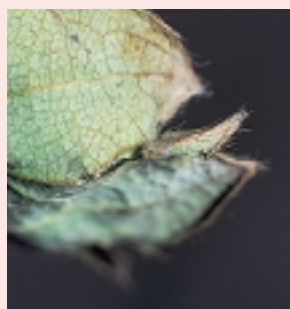
発生消長（成虫）



形態および生態

- 成虫は腹部が下ぶくれ状に丸
い。体色は灰茶色で前翅には
暗色の不規則な斑模様がある。

- 成虫は年1回発生し、5月か
ら始まって9月まで見られる。
成虫は1カ月以上生存し、長
期間にわたりイチゴ、コキヤ
ナギ、コデマリ、カリン、ス



↑ 卵塊が入っているイチゴの
葉縁部。



↑ 葉に包まれている卵塊。

グリ、ツツジ、アメリカハナ
ミズキ、アラカシなど主に樹
木類の新芽や新葉を食害する。

- 成虫は葉縁に数個から十数個
の卵を産みつけ、そのあと葉
を折りたたんで卵塊を隠す。
- 孵化幼虫は地中に潜り、産卵
した植物の根を食害して成長
する。

被害のようす

- 成虫は圃場外から飛来し、イ
チゴの葉を食害する。飛来が
始まる5月は、施設栽培では
栽培も終わりに近づいている
ため実害はないが、家庭菜園
などの露地栽培の場合はイチ

ゴや育苗中の葉に被害を生じ
る。葉縁から中肋や太い葉脈
を残すように食害する。

- 成虫は多数集合する性質が強
いので、イチゴでも被害は株
単位で発生するが、圃場全体
に被害が発生することはまれ
である。
- 幼虫はイチゴの根を食害する
が、食害量は少ない。発生数
そのものも少ないので、地上
部に与える影響はこれまで知
られていない。

防除のしかた

イチゴ スグリゾウムシの成虫
は薬剤に弱く、また、発生する